

平成23年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が5問で、表紙を除いて10ページです。
- 4 解答用紙は1枚で、答え方はマークシート方式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 答えは、解答用紙に記載されている〔解答マーク記入上の注意〕、および試験開始前に行われたマークシート練習プリントにしたがって、ていねいにマークしなさい。
- 7 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 8 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

一

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一 次の一線の(1)、(2)は同じ読みものを、(3)、(4)のカタカナ

は同じ漢字を用いるものを、それぞれ「」の中から選べ。

(1) 御殿

「ア 統御」イ 御者 ウ 制御 エ 御飯

(2) 極上

「ア 極限」イ 究極 ウ 極端 エ 至極

(3) ノウ密

「ア ノウ厚」イ ノウ耕 ウ ノウ率 エ ノウ涼

(4) ソン続

「ア 破ソソ」イ ソソ在 ウ ソソ敬 エ 子ソソ

問二 「収支」と成り立ちが同じ熟語は、次のどれか。

ア 保守 イ 未納 ウ 縦横 エ 看病

問三 「石の上にも三年」の意味に最も近い熟語は、次のどれか。

ア 慎重 イ 無関心 ウ 忍耐 エ 希望

二

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一 次の例文のれると意味・用法が同じものは、後のどれか。

英語スピーチコンテストで、クラスの代表に選ばれる。

ア いつも笑顔でいれば、多くの人に愛される。

イ 卒業文集を読むと、友人の顔が思い出される。

ウ 毎週月曜日には、朝礼で校長先生が話される。

エ 自宅から駅まで、歩いても五分で行かれる。

問二 次の例文ののと意味・用法が同じものは、後のどれか。

彼の考えは、私の考えていることとは違う。

ア 集合写真の中で、右から二番目の女性が母です。

イ 昔の仲間が集まり、みんなで夕食を食べるのは楽しい。

ウ 相手が嫌がっているのに、なぜそういうことをするのか。

エ 九月になっても、風のない午後は気温が上がる。

問三 次の例文の行くを謙讓語に改めるとき、最も適当なものは後のどれか。

今、先生のお宅へ行くところです。

ア 向かう イ うかがう

ウ いらつしやる エ たずねる

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

〔注1〕
 筆箒師用光、海賊にあひにけり。ころされんとする時、海賊に向かひていはく、「我(私ハ長イ間、タテ筆奏者トシテ朝廷ニ仕ヘ、世ノ中デ認めラレテキタ)ひさしく筆箒をもて朝につかへ、世にゆるされたり。今(前田ノ親イデソウナリ)いふかひなく、賊徒のために害されんとす。これ宿業(吹コウ)のしからしむるなり。しばらくの命をえさせよ。一曲ふかん」といへば、海賊ぬける太刀をおさへてふかせけり。用光、最後のつとめと思ひて、泣々臨調子を吹きにけり。その時、なさけなき群賊も感涙をたれて、用光をゆるしてけり。あまつさへ、淡路の南浦までおくりて、おろしをきけり。諸道に長ぬるは、かくのごとくの徳を、かならずあらはすことなり。(「古今著聞集」から)

〔注2〕臨調子(りんぢょうし) 筆箒の秘伝の一曲

問一

いふかひなく、なさけなきの本文中での意味は、それぞれ後のどれか。

(1) いふかひなく

ア 命ごいのかいなく

イ どうしようもなく

(2) なさけなき

ア 風流心のない

イ 乱暴この上ない

ウ かわいそうな

エ あきれるような

問二

ころされんとする、おろしをきけり。の主語の組み合わせとして適当なものは、次のどれか。

ア ①用光 ④用光

イ ①海賊 ④海賊

ウ ①用光 ④海賊

エ ①海賊 ④用光

問三

しばらくの命をえさせよ。とあるが、この時の「用光」の心情として最も適当なものは、次のどれか。

ア 「筆箒」に対する執着

イ 「宿業」に対する不満

ウ 「海賊」に対する恨み

エ 「諸道」に対する期待

問四

用光をゆるしてけり。とあるが、その理由として最も適当なものは、次のどれか。

ア 「用光」の堂々とした態度に感心したから

イ 「用光」の演奏に宿る力が心を動かしたから

ウ 「用光」の悲しげな姿が同情を誘ったから

エ 「用光」の演技にだまされてしまったから

問五

文中に描かれている内容として適当なものは、次のどれか。

ア 長く芸道に携わると、運命を変える力が身に備わる。

イ 技芸によって、人は財産を手に入れることができる。

ウ 芸を多く修得した人ほど、自分の危機を回避できる。

エ 修得した素晴らしい技芸は、本人に恩恵をもたらす。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

これまでの教育では、人間の頭脳を、倉庫のようなものだと見てきた。知識をどんどん蓄積する。倉庫は大きければ大きいほどよい。中にたくさんのもものが詰まっていればいるほど結構だとなる。 (a) 蓄積しようとしている一方から、どんなものもがなくなっていくたりしてはことだから、忘れるな、が合言葉になる。ときどき在庫検査をして、なくなっていないかどうかをチェックする。それが、テストである。

倉庫としての人間の頭にとっては、忘却は敵である。博識は学問のある証拠であった。ところが、^②こういう人間頭脳にとっておそるべき敵があらわれた。コンピューターである。これが倉庫としてはすばらしい機能をもっている。(b) 入れたものは決して失わない。必要なときには、さっと、引き出すことができる。整理も完全である。

コンピューターの出現、普及にともなって、人間の頭を倉庫として使うことに、疑問がわいてきた。^③コンピューター人間をこしらえていたのでは、本物のコンピューターにかなうわけがない。

そこで (c) 独創的人間ということが問題になってきた。コンピューターのできないことをしなくては、というのである。

人間の頭はこれからも、一部は倉庫の役を果たし続けなくてはならないだろうが、それだけではいけない。新しいことを考え出す工場でなくてはならない。倉庫なら、入れたものを紛失しないように

しておけばいいが、ものを作り出すには、そういう保存保管の能力だけではしかたがない。

(d) やたら工場にもものが入っていては作業能率が悪い。よけいなものは処分して、広々としたスペースをとる必要がある。それかと言って、すべてのものを捨ててしまっっては仕事にならない。整理が大事になる。

倉庫にだって整理は欠かせないが、それはあるものを順序よく並べる作業である。それに対して、工場内の整理は、作業のじやまになるものをとり除く作業である。

この工場の整理にあたることをするのが、忘却である。人間の頭を倉庫として見れば、危険視される忘却だが、工場として能率をよくしようと思えば、どんどん忘れてやらなくてはいけない。

そのことが、今の人間にはよくわかっていない。それで工場の中を倉庫のようにして喜んでいる人があらわれる。^④工場としても、倉庫としても機能しない頭を育ててしまいかねない。コンピューターには倉庫に専念させ、人間の頭には、知的工場に重点をおくようにするのが、^⑤これからの方向でなくてはならない。

それには、^⑤忘れることに對する偏見を改めなくてはならない。そして、そのつもりになってみると、忘れるのは案外、^{注1}難しい。

例えば、何か突発の事件が起こったとする。その渦中^{注1}の人は、あまりのことに、あれもこれもいろいろなことが一時に殺到する。頭の中へどんどんいろいろなことが入ってきて、混乱状態におちい

る。□、どうしていいか、わからなくなる。これが「忙しい」のである。「忙」の字は、心(りっしんべん)を亡くしている
と書く。忙しいと頭が働かなくなってしまう。頭を忙しくしてはい
けない。がらくたのいっぱい倉庫は困る。

平常の生活で、頭が忙しくてはいけない。人間は、自然に、頭の中を整理して、忙しくならないようになっていく。

睡眠である。

眠ってからしばらくすると、レム睡眠(注2)というものが始まる。マブタがピクピクする。このレムの間に、頭はその日のうちにあつたことを整理している。記憶しておくべきこと、すなわち、倉庫に入れるべきものと、処分してしまつてよいもの、忘れるものとの区分けが行われる。自然忘却である。

朝目をさまして、気分爽快(そうかい)であるのは、夜の間に、頭の中がきれいに整理されて、広々としているからである。何かの事情で、それが妨げられると、寝ざめが悪く、頭が重い。

⑥ 朝の時間が、思考にとつて黄金の時間であるのも、頭の工場の中がよく整頓(せいどん)されて、動きやすくなっているからにはかならない。

昔の人は、自然に従つた生活をしていたから、神の与え給うた忘却作用である睡眠だけで、充分、頭の掃除ができた。ところが、今の人間は、情報過多といわれる社会に生きている。どうしても不必要なもの、頭にたまりやすい。夜のレム睡眠くらいでは、処理できないものが残る。これをそのままにしておけば、だんだん頭の中が混乱し、常時、「忙しい」状態になる。ノイローゼなども、そうい

う原因から起こる。

かつては、忘れてはいけない、と言つていられた。倉庫として頭を使った。中が広々していたからである。このごろは入れるものが多くなつたのに、スペースには限りがある。その上、倉庫だけではなく工場としてもを作り出さなくてははいけない。場ふさがりごろろしているのは不都合である。

⑦ 忘れる努力が求められるようになる。

頭をよく働かせるには、この「忘れる」ことが、きわめて大切である。頭を高能率の工場にするためにも、どうしても絶えず忘れる必要がある。

忘れるのは価値観に基づいて忘れる。おもしろいと思つていることは、些細(ささい)なことでもめつたに忘れない。価値観がしっかりしていないと、大切なものを忘れ、つまらないものを覚えていくことになる。これについては、さらに考えなくてはならない。

(外山滋比古「思考の整理学」から)

(注1) 渦中(うずちゅう)Ⅱ騒動の中

(注2) レム睡眠Ⅱ夢を見ている時のような浅い睡眠

問一 ① 人間の頭脳、コンピュータとあるが、その説明として適当なもの、次のどれか。

ア 人間の頭脳には獨創性があるので、コンピュータのように倉庫としての役割を担う必要は全くない。

イ 人間の頭脳もコンピュータも定期的に、じやまになるものをとり除いて整理をする必要がある。

ウ 人間の頭脳は記憶するという点ではコンピュータにはかなわないが、自ら考え出すことができるという利点を持っている。

エ コンピューターは一度入れた情報を失うことはほとんどないが、たまに人間の頭脳と同じく在庫検査をしなければならない。

問二 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものは、次のどれか。

ア [a] いったん b せっかく c だいいち d ようやく

イ [a] せっかく b いったん c ようやく d だいいち

ウ [a] だいいち b ようやく c いったん d せっかく

エ [a] ようやく b だいいち c せっかく d いったん

問三 ③ コンピューター人間とあるが、その説明として適当でないものは、次のどれか。

ア 電子機器をうまく使いこなすような人間

イ 膨大な知識を完全に整理できるような人間

ウ 一度覚えたことは決して忘れないような人間

エ 状況に応じた知識を取り出せるような人間

問四 ④ 工場としても、倉庫としても機能しないとあるが、その説明として適当なものは、次のどれか。

ア 蓄えておくべき知識量が不足しているのはもちろん、新しいことを考え出すための獨創性も不足していること

イ 不要な知識をどんどん忘れるのはもちろん、必要なことまでも忘れてしまうこと

ウ 新しいことを考え出せないのはもちろん、知識を順序よく並べることすらもできないこと

エ コンピューターと人間の役割が正しく理解できていないのはもちろん、何をすべきかもわからなくなっていること

問五 ⑤ 忘れることに対する偏見とあるが、その説明として適当なもの、次のどれか。

ア 知識を蓄えるのには時間もかかり大変だが、忘れることは簡単だという安易な考え

イ 知識を蓄積するには集中力が不可欠だが、忘れるには努力が必要だという根拠のない考え

ウ 知識は多すぎてもよくないが、忘れることは更によくはないという間違った見方

エ 知識が多いことはすばらしく、それを忘れることは悪いことだという一方的な見方

問六

に入る語句として、適当なものは次のうちどれか。

- ア 茫然自失ぼうぜんじしつ
- イ 馬耳東風
- ウ 一心不乱
- エ 心機一転

問七

⑥ 朝の時間が、思考にとって黄金の時間であるとあるが、その理由として適当なものは、次のどれか。

- ア 目が覚める時までには、前日の良い情報が記憶として脳に定着しているから
- イ 人間の頭は、睡眠中に記憶すべき情報の取捨選択が行われることで、思考に適した状態になるから
- ウ 睡眠をとることで頭の中の嫌な情報が忘却され、次の日には新しい気分になることができるから
- エ 睡眠中に一度思考が休止することで、朝になると頭の中を整理する余裕が生まれるから

問八

⑦ 忘れる努力が求められるようになる。とあるが、その理由として最も適当なものは、次のどれか。

- ア 忘却は敵だという言葉に縛られた現代の人々は、何も忘れることができないから
- イ 努めて睡眠時間を増やすことで、常時「忙しい」状態の脳内の負担を少しでも軽減させなくてはいけないから

ウ 昔の人に比べて必要な知識量が増えた分、つまらないものばかり覚えていく人が増えたから

エ 情報が多すぎる現代社会の中で新しいことを考え出すには、不要な情報の処理を進んで行う必要があるから

問九

本文中で述べられている内容と合っているものは、次のどれか。

- ア 知識を多く蓄えるほど、現代社会の中で生きる人間に求められる独創性を培つちかうことができる。
- イ 新しいことを考え出すためには、単に知識を順序よく並べるだけでなく、捨てることも大切である。
- ウ 昔の人間が新しいことを考え出せなかったのは、しっかりとした価値観を持たなかったからである。
- エ コンピューターは人間以上に保存保管の能力に優れているので、人間の仕事をすべて任せてしまうことが可能である。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

南禅寺(注1)の近くに、手ごろな売り家があると、しらされたから、秋びよりの散歩かたがた、見に行ってみようと、太吉郎は妻と娘とを誘った。

「お買いやすおつもりですか。」と、しげは言った。

「見てからのこつちや。」と、太吉郎は、にわか(注2)にふきげんで、

「割安でな、ちつちやいうちやそうな。」

「……………」

「歩くだけでも、ええやないか。」

「そうですけど……………」

しげには、不安があった。その家を買って、今の店へ通おうというのか。——東京の銀座や、日本橋のように、中京(注2)の間屋町でも、主人は別に家を持って、店へ通うのが多くなってきた。それなら、まだいい。太吉郎の商いは、傾きつつあっても、小さいすまいを、別に持つくらい(注3)のゆとりは、(a)、残っているだろう。(b)、太吉郎は店を売ってしまった、その小さい家に「隠居」してしまおうと、考えているのではないか。(c)、それも、ゆとりのあるうちに、早く思い切った方が、いいのかもしれない。(d)、それなら、南禅寺あたりの小さい家で、主人は何をして暮らしていこうというのであろうか。主人も五十半ばを過ぎているのだから、好きなように暮らさせてあげたい。店は相当に売れる。それでも金利生活をしていくのは、心細いばかりだろう。だ

れかにその金をうまく回してもらえれば、気楽に行けそうだが、しげはとつきに、そんな人が思い浮かばなかった。

母のこのような不安は、口に出さなくても、娘の千重子に、通じたようだった。⁽⁴⁾千重子は若い。母を見る目に、なぐさめがあらわれ

た。⁽⁵⁾太吉郎は明るく、楽しげである。

「お父さん、あのへんをお歩きやすなら、青蓮院(注3)のところを、ちよつとだけ、通ってついでにだけしまへんやろか。」と、千重子は車のなかで頼んだ。「ほんの入り口の前だけ……………」

「楠(注4)やな。楠がみたいのやろ。」

「そうやの。」千重子は、父の察しのいいのにおどろいた。⁽⁶⁾

「楠どす。」

「いこ、いこ。」と、太吉郎は言った。「お父さんもな、若いときに、あの楠の大木の木かげで、友だちと、いろんなことを、話したもんやった。——その友だちは、もうだあれも、京都にはいやへんけど。」

「……………」

「あのへんは、どこもなつかしいな。」

千重子はしばらく、父の若い思い出にまかせておいてから、

「あたしも、学校を出てから、昼間、あの楠を見たことあらへんわ。」と言った。

車は青蓮院の前に着いていた。

千重子が、どうして、楠を見たいと思いついたのか。植物園の楠

並木を歩いたためか。また、北山杉はいわば栽培されたもので、自然の太木が好きだと、杉の村の苗子が言ったためか。

しかし、青蓮院の入り口の、石がきの上の楠は、四本ならんでいる。なかでも、手前のが、もつとも老木であるらしい。

千重子たち三人は、その楠の前に立って、ながめて、なんとも言わなかった。じいっと、ながめてみると、大楠の枝の、ふしぎな曲がり方に、のびひろがり、そして、交わった姿には、なにか不気味な力がこもっているようでもある。

「もう、ええか。いこう。」と、太吉郎は南禅寺の方へ、歩き出した。

太吉郎は、ふところの財布から売り家の道案内をかけた紙を出して、ながめながら、

「なあ、千重子、楠て、お父さんも、よう知らんけど、暖かい土地、南国の木やないのやろか。熱海とか、九州とかでは、そら、さかんなもんや。ここのは老木やけど、大きい盆栽みたいな感じがせえへんか。」

⑦「それが、京都やおへんの？ 山でも、川でも、人でも……。」と、千重子は言った。

「ああ、そうか。」と、父はうなずいたが、

「人間は、みながみな、そうとはかぎらへんけどな。」

「……………」

「今のかて、むかしの歴史の人かて……………」

「そうどすな。」

「千重子のように言うたら、日本という国が、そうやないか。」

「……………」千重子は、父の話の大きくなったのを、いかにも思ったが、

「そやけど、お父さん、あの楠の幹でも、妙にひろがった枝でも、よう見てると、こわいようにおもいまつせ、えらい力やおへんの？」

「そらそや。若い娘が、そないなこと、思てるの？」と父は楠をふりかえり、それから、娘をじつとながめて、

「たしかに、千重子の言う通りや。千重子の、黒光りする、髪がのびるのかて……………お父さんが、鈍うなつてもたんやな。老いぼれたんやな。いや、ええこと、聞かしてもらた。」

⑨「お父さん。」と千重子は強い情をこめて、父を呼んだ。

(川端康成「古都」から)

(注1) 南禅寺なんぜんじ 〓 京都市内の臨濟宗の寺

(注2) 中京なかつう 〓 京都市内の中央部

(注3) 青蓮院しょうれんいん 〓 京都市内の天台宗の寺

(注4) 苗子なえこ 〓 千重子とは双子の姉妹

問一 ① 太吉郎は、にわかになきげんで、とあるが、その理由として最も適当なものは、次のどれか。

- ア いつもの「しげ」の儉約ぶりが気に入らなかったから
- イ 家長としての威厳を見せようと思ったから
- ウ 「しげ」が気乗りせず不服そうに見えたから
- エ 娘にも浪費癖をとがめられたような気がしたから

問二 ② しげには、不安があった。とあるが、その理由として適当なものは、次のどれか。

- ア 夫が仕事をやめた場合、何をして暮らしていくつもりか分からず心配だったから
- イ 夫が新しい家を買って、今の店へわざわざ通うつもりなのかと心配だったから
- ウ 夫の商売が傾きつつあり、どうにもならないことになるのではないかと心配だったから
- エ 夫が店を売って、好きなように暮らすのではないかと心配だったから

問三 ③ 傾きつつあって、察しのいいの本文中での意味の組み合わせとして適当なものは、次のどれか。

- ア 再び倒れ始めて ⑥ とつさに判断する
- イ ③ ついに沈み始めて ⑥ 思いやりが深い
- ウ ③ 少しずつ衰え始めて ⑥ 鋭く心を見抜く

エ ③ さらに分散し始めて ⑥ 早く感じ取る

問四 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものは、次のどれか。

- ア 「a しかし b まだ c でも d あるいは」
- イ 「a まだ b しかし c あるいは d でも」
- ウ 「a あるいは b まだ c でも d しかし」
- エ 「a でも b しかし c あるいは d まだ」

問五 ④ 千重子は若い。とあるが、この表現の説明として最も適当なものは、次のどれか。

- ア 母の不安にいち早く気づくことができ、反応がすばやいということ
- イ 将来の不安などは「千重子」自身には関係もなければ、理解することもできないということ
- ウ 母の不安を、まるで自分のことのように重く感じてしまうということ
- エ 現実的な不安や困難な問題に対して、押しつぶされない力があるということ

問六 ⑤ 太吉郎は明るく、楽しげである。とあるが、その説明として適当なものは、次のどれか。

ア 「千重子」に元気づけられる「太吉郎」の様子から、父と娘との仲睦まじさがかがわれる。

イ 「太吉郎」の感情の変化に、周囲が戸惑っているにもかかわらず、自分勝手に振舞う姿が感じられる。

ウ 妻の態度に一喜一憂する「太吉郎」の様子に、夫婦の情愛を感じ取ることができる。

エ ふきげんだった「太吉郎」が、家を出て間もなくきげんを直すなど、その時々々の気持ちの変化が読み取れる。

問七 ⑦ それが、京都やおへんの？ とあるが、ここでの「京都」

の内容として適当なものは、次のどれか。

ア 長い歴史的な時間の中で、しだいに衰退していく古き都である。

イ 長い歴史や伝統の積み重ねによって形作られた、重みを持つ場所である。

ウ 南国の海に面したような土地ではなく、山に囲まれた狭い盆地である。

エ 盆地の中に、都市計画に基づいて整然と作られた近代的な都市である。

問八 ⑧ えらい力とあるが、その説明として適当でないものは、次のどれか。

ア 人々を長い間じつと見守り続けてきたことを感じさせる包容力

イ 他の木よりも一段と老いて見える姿の中に隠された力強い生命力

ウ 妙にひろげた枝から感じられる人の考えでははかり知れないふしぎな力

エ 長い時間が刻まれた太い幹から感じられる豊かな自然の力

問九 ⑨ 千重子は強い情をこめて、父を呼んだ。とあるが、そのとき

の「千重子」の気持ちとして最も適当なものは、次のどれか。

ア 老いた父の姿を頼りなく感じ、戸惑う気持ち

イ 常に愛情を注いでくれる父へ、改めて感謝を伝えたい気持ち

ウ 弱気になっていく父を励まし、支えようとする気持ち

エ 家長である父に、励ましと支えを求める気持ち